

# 第11回例会報告

## — 講演 —

### 中国に進出した企業の現状と これからの多摩の中小企業が勝ち抜くためには (岩手県釜石での被災体験)

多摩ブルー・グリーン賞選考委員長の関 満博 教授から、東日本大震災当日に岩手県釜石市で被災された体験談と、「中国に進出した企業の現状とこれからの多摩の中小企業が勝ち抜くためには」というテーマでお話いただきました。

#### 講演内容

2011年3月11日、岩手県釜石市中心部のホテルで「いわて三陸発！海の産業創造セミナー」の講師として打ち合わせをしていた時、いきなり建物全体が激しく揺れ始めた。揺れは激しかったが、ホテル内の被害はそれほどでもない。「ひとまず出よう」と玄関前に出てみても目立った被害はなかった。深刻な地震ではないと思ったが、子供の頃から房総半島出身の父に「津波ほど怖いものはない」と散々言われてきたこと、そして場所が三陸ということもあり、高い場所に避難を始めた。

地震による直接の被害がそれほどなかったからだろう、まわりの皆も慌てることなく歩いて避難していた。歩き始めて20分ほどで高台の上に着いた。ちょうどその時、遠くから“ゴーツ”という低い音が響いた。津波だった。

それからどれくらい時間が過ぎたか覚えていないが、高台から下り始めてすぐに大量のがれきに出くわした。この時、「大変なことになった！」とわかった。

少し離れた病院へ避難して一晩過ごし、翌朝外に出て被害の大きさに改めて驚いた。釜石の中心部では思いのほか建物が残ってはいたが、中にまでがれきが流れ込んでいる。私は父の教えを思い出し、津波に巻き込まれなかったが、建物の倒壊など地震による直接の被害が小さかった分、津波から逃げ遅れた人も多いに違いない。

私はこれまで震災したさまざまな地域に関わり、大きな被害に直面した経営者たちとさまざまな形で向き合ってきた。そのなかで感じたのは、産業の立て直しは一番最後にされがちだが、地域を本当に立て直す基盤となるのが産業だ。経営者は、経営者同士のネットワークを生かし、いち早く立ち直らせることが重要になる。



ここで本題に入るが、被災していない地域においても、製造業をめぐる現状は大変厳しいものだ。「ものづくり日本」と言われるものの、90年以降のものづくりの現場は刺激や発見がなくなってきたように思う。

それに比べて中国は、たった1週間滞在するだけで新しい発見が必ずある。それほど産業において魅力的な国へと進化した。

かつて台湾が行っていた仕事も、ここ4~5年の間で中国ローカルへとシフトした。IT関連はとくにその傾向が顕著だ。中国の経営者は若く、頭が良く、技術もお金もあるのに対して、台湾は若い経営者がおらず、活性化に欠けるため中国になかなか勝つことができない。そして、中国進出について言及すると、その台湾と同じものをつくっても日本は勝つためしがないというのが現状だ。

勢いのある現代の中国は40~50年前の日本の姿だ。中国には、「すでに形のあるものは必ずできる。誰かがやったことは必ず自分にもできる」と確信をもって賢明に働く若者たちで溢れている。その姿は、日本の鏡となるだろう。今こそ日本の企業は我が身を振り返り、新しい一歩を踏み出さなければならない。

<p><b>講師</b> プロフィール Lecturer Profile</p>	<p><b>関 満博 氏</b> [明星大学教授／一橋大学名誉教授] 1948年生まれ。成城大学大学院博士課程を修了。専修大学等を経て、1998年から一橋大学教授に就任し、現在は名誉教授となる。2011年4月に明星大学経済学部教授に就任。</p>
--	---